

来船清人が見た富士山—中国における日本発見の一齣—

唐 権

「富士」の名がはじめて中国文献に現れたのは、十世紀頃に成立した『義楚六帖』という仏教の類書にまで遡る。同書には日本人僧侶から聞いた噂として、真偽交々の富士山情報が述べられている。もっとも、『義楚六帖』が早くも逸書になったこと、その後数百年の間に富士山関連の記載が他に一つも見当たらないことなどを考えると、宋元時代の中国人が想像した日本列島の姿に、あるいは富士山は存在しなかったかもしれない。

富士山が次に登場したのは、明代以降のことである。明から清にかけて、日本と何らかの交流を持った一部の文人により、富士山はあらたに「発見」された、といったほうが実情に近いかもしれない。その経緯は意外にも紆余曲折があり、且つまた豊かな詩情と画趣が溢れている。この報告は、富士山をテーマにした漢詩文や絵画などの作品を拾い集め、近世中国における日本発見の一側面を浮き彫りにするものである。

まず、日本の山々と中国社会とのかかわりを把握すべく、正史各書の倭人伝や日本国伝を繙いてみた。そこに阿蘇山などいくつかの山が確かに記載されているが、富士山はしかし不在であった。それから明代後期の頃に編纂された日本研究の専門書にも注目した。予想通り、『日本考略』『日本風土記』などの代表的な書物にも富士山についての記述が一つも見つからなかった。結局、中国歴代の日本関連公式記録において、富士山は無視されつづけた山であった、といってもあながち間違いではないようだ。

ところが、上記の硬派な記録を離れて、ひとまずソフトな文芸の世界に目を転じると、富士山に注がれた中国人の視線は、それとは大きな差異があることが分かる。明代の頃に成立した富士山詩といえ、宋濂「賦日東十曲」をはじめ、「渡唐富士」と愛称される伝雪舟筆「富士三保清見寺図」に書き入れられた詹仲和なる寧波文人の画賛や、王偁「題張友謙倭扇山水」、周一居士「送人之日本」などが数えられる。これらの詩作は、作品の主題も創作の背景もまちまちだが、作者が中国国内にいながら富士山に思いを馳せた点は共通している。誰もが富士山を見られたわけではないこの時代、日本との交流により、富士山の存在を意外と近く感じられたのであった。

そして明末清初という激動の時代に入ると、富士山詩の創作も一つのピークを迎える。王朝交替の混乱を逃れるため、多くの中国人は日本へ渡った。陳元贊、朱舜水、東皐心越と木庵性韜の四人はいずれも明の遺民で、奇しくも富士山を目の当たりにした人物でもあ

る。彼らの富士山詩を数えてみると、陳と朱はそれぞれ一首ずつ、心越は三首、木庵は十首にもものぼる。詩の内容を見ると、たとえば陳元賛「題富士山並叙」の場合、詩人は富士山の美と神秘を賛美するだけでなく、自身の境遇と結びつけて、感動、驚嘆、哀傷などもろもろの感情をも発露している。このような豊かな感情表現は、他の富士山詩と一線を画したものであろう。

十八世紀以降、来船清人のほとんどは貿易商人に限られた。とは言え、彼らの中に優れた文芸的教養の持ち主が多くいた。日本滞在中、唐人屋敷に閉じ込められるが、それでも富士山についての噂をいろいろ聞いたらしい。証拠の一つに、例えば来船四大家の一人である伊孚九は南画風の富士山図を遺している。そんな中、方西園という来船画人のところに、富士山眺望という珍しいチャンスがやってくる。安永九年四月、悪天候により安房国の千倉浦に漂着した唐船に、方西園は乗っていた。現地の人々に救助されたのちに幕府の船で長崎に送還される途中、方は運よく富士山の姿を目の当たりにしたのである。この体験により、彼は後に多くの富士山図を描き、日中両国で名声を博したらしい。筆者が調査したところ、方が描いた富士山図の内、内容が確認できるものは少なくとも七点あり、富士山の多彩な姿がそこに遺されている。日本旧来のスタイルを踏襲したものもあれば、画家の独自の工夫で作りあげたスタイルもある。富士山をめぐる日中文化交流の歴史の中で、方西園は紛れもなく大きな足跡を残した存在であるといえよう。

ペリー来航以降から明治にかけて、多くの中国文人が日本の内地を訪れるようになり、富士山の詩もまた数多く吟ぜられた。中には黄遵憲『日本雜事詩』のような優れた作品も含まれているが、「賦日東十曲」以来の流れから見ると、もはや余韻にすぎないのである。